

2012 vol.18

## ゲシュタルトセラピー

## ようこそ吃音ショートコースへ

『ゲシュタルト療法では、この“今—ここ”を現在性といって重要視する。現在性こそが、クライアント理解や関わる手がかりの宝庫だからである。たとえば、父親のことを語っているクライアントが拳骨をつくっている場合、まず、拳骨をつくっているのは、“今—ここ”であり、その現象が観察されるのも“今—ここ”という場である。これをゲシュタルト療法では現象学的場とよんでいるが、この場こそ観察により気づくことができれば、多くの治療的介入の手がかりを発見することができる。

一方、クライアントの話す問題はトラウマ的体験であれ、心残りであれ、過去のものである。一方、神経症的不安であれ、恐れであれ、これらは未来を先取りしたものである。しかし、クライアントは単に過去になんらかの問題があったというだけではなく、現在においてもその問題を引きずって持っているということであり、一方、未来を不安に思ったり、恐れる場合も、現在においても不安や恐れを持っているということである。言い換えれば、過去のことも未来のことも、現在という時点で問題にしているということである。そして関わるという観点からは、過去のことも未来のことも、所詮、現時点でしか関われないということである。人間は過去に遡って解決したり、未来に飛んでいって経験できないのである。解決したり、経験できるのは現在しかないということになる。したがって、ゲシュタルト療法では、トラウマや心残りの体験、あるいは未来の不安や恐れを、“今—ここ”で再体験したり、先取りして経験することを心理治療的招きとして勧めるが、主眼は洞察を得て、現在を生きることができるようになるところに置かれている』



ゲシュタルト療法を日本に紹介し、高野山などでワークショップを開き、多くのセラピストを育ててこられた、第一人者、倉戸ヨシヤ先生は、ご著書でこう書いておられます。

吃音の中心的なテーマが、過去の失敗体験、嫌な経験によって、未来への不安や、恐怖にあることを考えれば、ゲシュタルト療法を体験し、学ぶことの意味がわかるでしょう。

吃音と、人生と、真剣に向き合い、誠実に生活している参加者の皆さん。どもる子どもの支援に誠実に取り組んでおられる臨床家の皆さん。こうしてお会いし、学び、語り合える幸せを強く感じます。実りある、楽しい3日間にしましょう。

いろいろな行事の多い秋の連休に、全国から集まって下さる皆さんを、心から歓迎致します。楽しく、真剣に学び合ひましょう。

日本吃音臨床研究会 伊藤伸二

2012.11.23 ~ 25

アクティブラザ琵琶

